

精神保健福祉実習における 教育効果の測定に関する予備研究

へのまつかつよ なかがわまさとし いとうひでゆき おだとしお ほりこしゆきこ
舩松克代 中川正俊 伊東秀幸 小田敏雄 堀越由紀子

〈要 旨〉

本研究では、本学における精神保健福祉士実習の教育効果を明らかにするための尺度の開発を行うことを目的にしている。指導教員がブレインストーミングによって12項目を抽出し、質問項目を作成後、本学23名の学生を対象に実施した。その結果、3因子が抽出され、第1因子「知識」、第2因子「興味・関心」、第3因子は2「不安」因子と命名した。以後、作成された尺度を「精神保健福祉実習に関する自己効力感尺度」とした。内容妥当性、構成概念妥当性も検証された。精神保健福祉実習に関する自己効力感尺度を実施した結果では、実習前後の比較結果から、実習により、「知識」「興味・関心」が高まることが示された。また実習事後では、不安尺度と興味・関心が負の相関を示した。このことから実習後に精神保健福祉分野に対して不安が低い学生は、興味・関心を持ちやすいことが考えられた。合わせて実施した社会的スキル尺度ではQ2が高度なスキル、Q3が攻撃処理のスキル、Q4が感情処理のスキル、Q17がストレス処理のスキルで実習後に得点の低下がみられ、Q15は初歩的なスキルは実習後で得点が向上した。このことは実習において複雑な対人スキルについては、より現実的な自己の対人スキルを認識できるようになったことが得点の低下に現れ、初歩的なスキルは自信を持って行えるようになったと考えた。

〈キーワード〉

精神保健福祉実習 教育効果 尺度

I はじめに

我が国の精神保健福祉士養成は1997年(平成9年)にスタートし、専門学校、大学においての教育が行われてきた。社団法人日本精神保健福祉士協会が発表した精神保健福祉士国家試験合格者数は、48,872人(2010年(平成22年)6月現在)であり、この12年で着実に総数が増えてきた。

精神保健福祉士教育は、その基幹となる社会福祉学や精神医学、心理学、社会学、法

学などの学問を習得するだけでなく、現場における精神保健福祉実習から得る学びや成長が重要である。この実習を通して、精神保健福祉士を目指す学生たちは、精神保健福祉領域の実情を目の当たりにし、そこに働く精神保健福祉士の姿をモデルとし、様々な援助実践を体験する。また現場に身を置きながら、自己覚知を行いながら、専門職としてのアイデンティティーのみならず、人間性を向上させていく。

現在、精神保健福祉士養成において定められている実習は180時間（目安）とされている。より高い専門性を担保できる養成の在り方が現在検討されており、実習時間が180時間から210時間へ拡充する指針が示され、一層実習教育の重要性が高くなっていく。実習を体験することによってもたらされる教育的効果が計り知れないことは、精神保健福祉士教育に携わる多くの教員が十分に実感していることだろう。だがあくまでも主観的評価に過ぎず、客観的評価においても効果が検討されることが望まれる。しかし精神保健福祉士教育における実習の効果を客観的評価を用いて測定した研究はなく、また測定するスケールもないのが現状である。本研究では、(1)実習の効果を測定できる尺度を開発し、(2)作成された尺度を実習前後で実施し、実習の教育的効果を測定することを目的とした。

Ⅱ 調査

以下の2つの尺度を用い、調査を行った。

(1) 精神保健福祉実習に関する自己効力感尺度の開発

尺度の原案の作成に当たっては、本学の精神保健福祉実習指導を担当する3名の教員がブレインストーミングにより項目を抽出し、KJ法にて12項目を採択した。(表1)本尺度の原案の評価は10段階評点法とした。

表1 精神保健福祉実習に関する自己効力感尺度の質問項目

項目内容
Factor1：知識
Q3：精神保健福祉士の仕事の内容について、どの程度理解できていますか？
Q6：実習で配属される以外の精神障害者が利用する他施設や関係機関についてどの程度知っていますか？
Q5：精神保健福祉士のほかの専門職の働きについて、どの程度知っていますか？
Q7：精神障害者の家族の状況について、どの程度知っていますか？
Q2：精神保健福祉士の働く施設や機関の機能や役割について、どの程度理解できていますか？
Q4：精神保健福祉士が行う具体的な援助技術について、どの程度理解できていますか？
Q8：地域社会で行われている精神障害者に対する活動をどの程度知っていますか？
Q1：精神保健福祉士の対象となる精神障害者について、疾患や障害についてどの程度理解できていますか？
Factor2：興味・関心
Q11：将来的に精神保健福祉士になって、精神保健福祉領域で働きたいとどの程度思っていますか？
Q10：精神保健福祉士という仕事にどのくらい興味がありますか？
Factor3：不安
Q9：精神障害者の人たちと接することにどの程度不安がありますか？
Q12：精神保健福祉の現場（実習）に対してどの程度不安がありますか？

(2) 社会スキルの評価

妥当性を評価するために、信頼性・妥当性が検証され、本邦の多くの研究で用いられている菊池の社会スキルの測定尺度 (Kiss18)³⁾ を用いた。Kiss-18 は 18 の質問項目から構成され、①初歩的なスキル②高度なスキル③感情処理のスキル④攻撃に代わるスキル⑤ストレスを処理するスキル⑥計画のスキルの 6 つのスキルに分類されている。この尺度は「いつもそうでない」1 点「だいたいそうでない」2 点「どちらとも言えない」3 点、「だいたいそうだ」4 点、「いつもそうだ」5 点とした 5 段階のリッカート法であり、合計得点は 90 点である。

Ⅲ 研究方法

1. 調査対象

田園調布学園大学人間福祉学部人間福祉学科の精神保健福祉士を目指す当時 3 年次生 23 名 (男性 15 名、女性 8 名) を対象とした。

2. 調査期間

3 年次春の精神保健福祉援助実習指導開始前 2009 年 9 月と実習終了後 2010 年 4 月に実施した。

3. 調査方法

精神保健福祉士実習に関する自己効力感尺度と菊池の社会スキルの測定尺度 (Kiss-18) を実施した。

4. 解析方法

(1) 精神保健福祉実習に関する自己効力感尺度の質問項目群の因子分析には、主成分分析を選び斜交回転 (Promax) を行い、因子構造を明らかにした。

(2) 抽出された因子得点の平均値および Kiss-18 の平均値を、t 検定を用いて実習前後で比較した。

(3) 自己効力感尺度の因子間および Kiss-18 の尺度間を Spearman の順位相関係数を用いて検討した。

統計処理は SPSS for Windows Ver18.0 を使用し、有意水準を 5% とした。

5. 倫理的配慮

調査に関しては、研究の目的、方法、自由参加であること、個人の情報が保護されることなどを文書に明記し、口頭でも説明を行い、同意を得た。

IV 結果

1 質問項目の因子分析

作成された 12 項目群の平均値、標準偏差を算出した。天井効果およびフロア効果は見られず、12 項目に対して主因子による因子分析を行った。固有値の変化から 3 因子構造が妥当であると考えた。そこで 3 因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。最終因子パターンと因子間相関は表 2 に示す。回転前の 3 因子で 12 項目の全分散を説明する割合は 75.9%であった。第 1 因子は 8 項目で構成されており、精神障害や社会資源などの知識を問う内容の項目が高い負荷量を示していたので、「知識」因子と命名した。第 2 因子は 2 項目で構成されており、「興味・関心」因子と命名した。第 3 因子は 2 項目で構成されており、「不安」因子と命名した。以後、作成された尺度を「精神保健福祉実習に関する自己効力感尺度」とした。

表 2 精神保健福祉実習に関する自己効力感尺度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

項目内容	因子負荷量			
	I	II	III	
Factor1: 知識				
Q3: 精神保健福祉士の仕事の内容について、どの程度理解できていますか?	.90	.05	-.02	
Q6: 実習で配属される以外の精神障害者が利用する他施設や関係機関についてどの程度知っていますか?	.84	.08	-.01	
Q5: 精神保健福祉士のほかの専門職の働きについて、どの程度知っていますか?	.83	.07	-.16	
Q7: 精神障害者の家族の状況について、どの程度知っていますか?	.83	.16	.15	
Q2: 精神保健福祉士の働く施設や機関の機能や役割について、どの程度理解できていますか?	.77	-.15	-.22	
Q4: 精神保健福祉士が行う具体的な援助技術について、どの程度理解できていますか?	.75	-.27	.19	
Q8: 地域社会で行われている精神障害者に対する活動をどの程度知っていますか?	.74	.06	.11	
Q1: 精神保健福祉士の対象となる精神障害者について、疾患や障害についてどの程度理解できていますか?	.68	-.02	-.02	
Factor2: 興味・関心				
Q11: 将来的に精神保健福祉士になって、精神保健福祉領域で働きたいとどの程度思っていますか?	-.05	.94	-.03	
Q10: 精神保健福祉士という仕事にどのくらい興味がありますか?	.12	.85	-.01	
Factor3: 不安				
Q9: 精神障害者の人たちと接することにどの程度不安がありますか?	-.05	.09	1.00	
Q12: 精神保健福祉の現場 (実習) に対してどの程度不安がありますか?	.05	-.17	.58	
	因子間相関	I	II	III
	I	1.00	-.02	-.01
	II	-.02	1.00	-.19
	III	-.01	-.19	1.00

2 下位尺度の実習前後の比較

精神保健福祉実習に関する自己効力感尺度を用いて、実習前後の比較検討を行う為、各下位尺度得点について t 検定を行った。(表 3) その結果、知識下位尺度 ($t=2.79$, $p=0.01$) と興味・関心下位尺度 ($t=2.40$ $p=0.02$) で事前よりも事後の方が有意に高い得点を示していた。不安下位尺度では事前事後の得点差は有意ではなかった。($t=0.38$, $p=0.71$.)

表3 下位尺度の実習前後の比較

	事前		事後		t	p
	平均値	S D	平均値	S D		
知識	4.47	1.47	5.68	1.47	-2.79	.01*
不安	5.00	2.30	4.76	1.96	.38	.71
興味・関心	6.37	2.10	7.65	1.47	-2.40	.02*

*p<.05

3 下位尺度の実習前後の相関

実習前後の自己効力感下位尺度の相関係数を表4, 5に示す。事前ではどの尺度でも有意な相関を示さなかった。事後では、不安尺度と興味・関心が負の相関を示した。(p=-0.52)

表4 実習前下位尺度の相関

	知識	不安	興味・関心
知識	—	0.003	0.013
不安	0.003	—	-0.220
興味・関心	0.013	-0.220	—

p<.05

表5 実習後の下位尺度の相関

	知識	不安	興味・関心
知識	—	-0.191	0.189
不安	-0.191	—	-0.522*
興味・関心	0.189	-0.522*	—

*p<.05

4 社会的スキル尺度 (Kiss-18) の分析

(1) 実習前後の比較

実習前後の差の検討を行うため、kiss-18についてt検定を行った。その結果、実習前後の得点差は有意ではなかった。(t=0.79, n.s.) 男女における事前事後の得点差の検討を行うためにkiss-18についてt検定を行った。その結果、男女の得点差は実習前後で有意な差は見られなかった。

(2) 項目別の実習前後の比較

実習前後のKiss-18の項目別の得点差の検討を行うため、t検定を行った。その結果、表6に示すように、Q2, Q3, Q4, Q15, Q17の5項目で有意な差がみられた。

表 6 Kiss-18 項目別実習前後比較	<i>t</i>
Q 1 他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか	-0.25
Q 2 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか	-2.10 *
Q 3 他人を助けることを、上手にやれますか	-2.08 *
Q 4 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか	-2.31 *
Q 5 知らない人とでも、すぐに会話が始められますか	0.72
Q 6 まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか	0.65
Q 7 こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか	-0.44
Q 8 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか	0.00
Q 9 仕事をするとき、何をどうやったらよいか決められますか	-0.75
Q 10 他人が話しているところに、気軽に参加できますか	0.47
Q 11 相手から批難されたときにも、それをうまく片付けることができますか	0.51
Q 12 仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか	-1.55
Q 13 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか	-0.13
Q 14 あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか	-0.25
Q 15 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか	2.55 *
Q 16 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか	0.46
Q 17 まわりの人たちが自分とは違った考えを持っていても、うまくやっていきますか	-2.24 *
Q 18 仕事の目標をたてるのに、あまり困難を感じないほうですか	-1.24

**p*<.05

V 考察

これまでの結果を踏まえて、精神保健福祉実習に関する自己効力感尺度の実用性とそれを用いた結果から見える精神保健福祉実習の効果について検討を加える。

1 精神保健福祉実習に関する自己効力感尺度の開発

(1) 質問項目の内容妥当性の検討

項目の作成にあたっては、精神保健福祉領域での経験と実習生の指導経験を有する教員が質問項目について確認に携わり、特に問題は見当たらなかったため、内容妥当性は支持されたといえる。

(2) 構成概念妥当性

抽出された因子は、ブレインストーミングによって得られた概念と類似しており、ほぼ同様の結果を示されていた。

各因子の寄与率は、第1因子45.9%、第2因子2.74%、第3因子10.1%で、累積で総計約78%であり、十分な寄与率を示しているといえる。

第1因子は、精神保健福祉領域に対する知識を問う項目である。細かな知識ではなく、精神保健福祉領域、そこに携わる専門職、当事者に対して大枠を捕らえられているかイ

メージを問うている。第2因子は、精神保健福祉領域や職業に対する興味・関心を尋ねている。興味や関心を持てるかどうかということは、精神保健福祉領域に関わり続ける大きなモチベーションとなる。その第一歩が実習であり、そこでの体験がどの程度反映されるのかというのは重要な項目である。第3因子は、実習や現場または当事者に対しての不安を問うている。知識や興味関心を持っていても、精神保健福祉領域に対してはスティグマを抱えている学生も多く、このスティグマが不安につながって阻害要因になっている可能性が高い。

以上のように因子分析の結果では3因子となったが、当初教員がブレインストーミングによって考えていた概念枠組みとほぼ同じである。また累積寄与率は第3因子までで78%であり、十分に高い値が出たと考えられ、基準を満たしている。

2 精神保健福祉実習に関する自己効力感尺度の実習前後の変化

精神保健福祉実習に関する自己効力感尺度では、実習前後の比較結果から、実習により、「知識」「興味・関心」が高まることが示された。不安は実習前後で有意な差はなかった。わずかな得点差であった不安は、統計学的有意差を示すには今回対象群数が23と少ない。不安のあるなしではなく、不安の程度を尋ねたため、差が点数として反映されにくく、より明確な傾向が出にくかった可能性がある。大西らの研究では、精神保健福祉実習前後でSTAIを用いて、不安を測定している。その結果によると実習前後で状態・特性不安それぞれについてともに有意差が認められなかった。しかし実習後では両尺度とも低下する傾向はみられ、このことから「恐怖心や先入観などの不安要因を取り払い、好ましい経験を体験することができたからではないか」¹⁾と指摘している。本研究でも統計学的には有意差は見られなかったが、同様に実習後の不安得点は低下しており、実習前の予期不安が体験を通して解消されていったとも考えられる。

実習前後の下位尺度の相関係数では、事前ではどの尺度でも有意な相関を示さなかった。事後では、不安尺度と興味・関心が負の相関を示した。これらの結果と事前事後の得点差の検討結果から、実習後に精神保健福祉分野に対して不安が低い学生は、興味・関心を持ちやすいことが考えられた。つまり実習を通して不安が軽減することで、興味・関心が高まり、その分野や職業により一層関心を持つようになるといえる。予期不安が減少することで、興味関心は上昇し、現実的な不安を感じることで、興味関心が減少する。実習で不安を感じた学生は、時に精神保健福祉実習が辛い体験として残り、モチベーションが低下してしまうこともしばしば経験しており、教員として感じている主観的な印象ともつながる。大西らは、精神保健福祉士養成課程の実習の適応度と職業的進路意思決定との関連をみた研究を行っている。その中で実習に迷いの状態で打ち込めず受

け身で不全感が強い状態を見る「実習モラトリアム」と実習に自発的な学習意欲が起らず、指導者の言われるままで混乱や不安が強い状態を測定する「実習拡散感」が職業決定のネガティブな面と関係していたと報告している。²⁾ このように実習への取り組みが職業同一性への影響を示しているのは、単に実習が専門的知識を与える学習の場ではなく、青年期の自我同一性を獲得し、職業同一性の育成も同時に行われる必要性を示唆している。

3 精神保健福祉実習前後の社会的スキルの変化

実習前後において社会的スキル尺度の総点に差は見られなかったが、「Q2：他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか」、「Q3：他人を助けることを、上手にやれますか」、「Q4：相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか」、「Q17：まわりの人たちが自分とは違った考えを持っていても、うまくやっていけますか」の4項目で実習後得点が低くなり「Q15：初対面の人に、自己紹介が上手にできますか」は実習後得点が高くなっている。これらの項目は、Q2が高度なスキル、Q3が攻撃処理のスキル、Q4が感情処理のスキル、Q17がストレス処理のスキル、Q15は初歩的なスキルに当てはまる。このことから、実習において複雑な対人スキルについては、より現実的な自己の対人スキルを認識できるようになったことが得点の低下に現れ、初歩的なスキルは自信を持って行えるようになったと感じていると考えられる。

専門的な技術以前にコミュニケーションスキルの乏しさが実習の躓きになる場合が少なくない。コミュニケーションスキルに困難性を抱える精神障害者との関わりの中で、コミュニケーションスキルを変化させながら駆使することが求められる。この重要性を実感してほしいというのが、実習に送り出す筆者らの思いであり、上記の結果は、いわば狙い通りの体験をしていることの表れとも取れる。

VI 本研究の限界と今後の課題

最後に、本研究の限界と今後の課題について述べる。まず本研究の対象となった学生数は少なく、統計学的に十分に検討しうるサンプル数を確保することが必要で、今後の課題となる。そのうえで、精神保健福祉実習に関する自己効力感尺度の信頼性、妥当性の検証を行い、さらに既存の尺度も併せて実施し、相関も検討していきたいと考えている。また精神保健福祉援助実習や学生の特性を明らかにするためには、対照群を設定した比較検討、複数のバッテリーを組み合わせての評価も検討していきたい。

<引用文献>

- 1) 菊池章、堀毛一也，社会的スキルの心理学．川島書店 1994 204 ページ
- 2) 大西良、辻丸秀策、大岡由佳ら，福祉学生の気分状態とSTAIとの関連性．久留米大学健康・スポーツ科学センター研究紀要 2005；13（1） 27 ページ
- 3) 大西良、辻丸秀策、藤島法仁ら，福祉実習生の進路決定に関する調査－職業的進路意思決定尺度と実習適応感尺度の測定結果の比較を中心に－．久留米大学健康・スポーツ科学センター研究紀要 2009；16（1）49 ページ

<参考文献>

- 1) 藤野ユリ子、室谷和子、佐藤一美，看護系大学4年生の学生生活や対人関係に関する認識と社会的スキル．産業医科大学雑誌 27（3）2005
- 2) 穂積功一，精神保健福祉士の教育実習の在り方を巡って－現場と大学教育の連携を目指して－，吉備国際大学保健福祉研究所研究紀要 7 2006
- 3) 工藤千賀子、原田真理子、櫛引美代子，G大学看護学部における社会的スキルの実態．北日本看護学会誌 10（1）2007
- 4) 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課「精神保健福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」，2010年3月29日
- 5) 大西良、辻丸秀策、大岡由佳ら，精神保健福祉現場実習における実習ストレスと対処行動．久留米大学健康・スポーツ科学センター研究紀要 13（1） 2005
- 6) 上野栄一，看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度の開発．日本看護科学会誌 25（2）2005